我國の東洋史學は甚だ盛況を呈し、專著、論文も數多く、東洋史の大系と稱するものも一二に止らないが一貫した見識の下に大綱を示した手頃の東洋史概說が甚だ少なかつた。この度史家を以て自ら任ぜられる著者によつて本書を得たことは喜ばしい限りであり、著者の近代支那史に爲された偉大な業蹟を思ふ時、本書の如き特に近代に優れた概說は他に或は容易に望み得ないかも知れない。又東洋史に適當な高等學校用の教科書の少なかつた——これは文部當局の所見である——時に本書を得たことは甚だ慶賀に堪へない。（目黑書店　貳圓六拾錢）〔增村宏〕

「大金得勝陀頌碑の研究」を讀む

大金得勝陀頌碑は漢文面の內容としては別に新しき事實なきも、たゞ本碑には女眞文の譯あるより早く學者の注意する所となり、二三の學者の研究も既に發表せられたり。然し從來の研究は皆漢文による研究にて未だ肝腎の女眞文に就ての研究あるを聞かず。此の意味に於て本誌第二卷五・六號に所載されし田村氏の研究は此の碑に就ての新研究なるのみならず、同時に又資料少き女眞語研究に一時期を劃したるものなりと云ふも過言にあらざるなり。

たゞ本碑は磨滅甚しき爲讀み得ざる文字甚多きは遺憾にて、田村氏の努力を以てしてもなほ多くの不明字あり。又氏の讀みし文字の中にも疑はしきものあり、もとより之等は此の種研究の常として、拓本により多少の意見の相違を來すは已むを得ざる所にて、特に女眞語の如き資料の極めて少きものにありては其の解讀は容易なるものにあらざるなり。余は氏の論文により啓發せられし所甚多かりしが、又同時に二三の誤讀かと思はるゝ所をも發見せり。今氣付きたるまゝに左に之を列記すべし。

Ⅰ「斡溫」は文(wên)の音譯にあらざるか。

Ⅱ「禿魯溫」、グルーベ(729)によれば緣故を「禿魯溫都言」と謂ふ。本文をみるに「禿魯溫」以下は少し離して小さく書けり。恐らく「緣故を記す」など謂ふ注解的の文ありしならむ。

Ⅵ　東余は車全とよむべきか。車の字は華夷譯語になし。全は har とよむべし。この文字は宴台碑（進士碑）にもありて、正大なる年號を譯して車全冬米と謂

へば、漢譯に對照するに恐らく「實」の字に相當するならむ。

Ⅶ 「納□林(因)必剌」は na-[li]-in-bira とよむべきか。na は la の相通にて漢文面の來流水ならん。金梁氏滿文內府一統輿地祕圖には Lalinbira とみゆ。

(1) 畢房は字房にて「立つ」の意なり。卽ち文意は「高阜に出で立ち」ならん。

(2) 「斡兀迷兒」は恐らく「背□兒」にして第二字は譯語になきも漢譯を對照するに國相の女眞譯なり。國相の女眞語に就ては種々の說あれどもこの女眞文字より想像するに單に begir 或は beiler にあらざるか。

XⅢ 未老は未老にて滿洲語 čambi に相等しく「駐蹕す」の意ならん。

XⅥ 乖は「革里」とよみ「又」の意ならん。

XⅧ 天拔开未の天は tai にて太の音譯ならん。次の三字は「原」の譯にて第二十七行に宗元の元を譯して同字あれども如何によみしか音は不明なり。

XXⅢ 夂夂 は謀克の意にて、次の「塞」は複數を示す。漢文の「諸道之兵」に當るものならむ。尙これにつきては他日詳說する所あるべし。

XXⅥ 「非兒□厄」は滿洲語にて「呪ふ」を firumbi と謂へば恐らく同字なるべし。

XXⅦ (1) 不兵史金中斧刈口第一の字は周の音譯にて、次の二字は明かならざれども「武」に相當する字ならむ。終りの三字は ači-in-? とよむべし。滿洲語の ačinggiyambi と同一語にて「動かす」の意なり。女眞文は「周武軍を動かす」の意ならんか。

(2) 寸兇右 上の二字は明ならざれども恐らくグルーベ(754)「稱哥剌」(受用)と同一字にて、漢譯文の「受」に相當するなるべし。

(3) 「扎□納」は jal-□-na とよむべし。「扎」はグルーベには ja と音譯したれども、滿洲語にて「命」を jalgan と云ふ。恐らくこの語と同一なるべし。

(4) この第二十七行の終りより二節目の一句は漢文の「孰云非眞」に相當す。「斡」は we にて「誰」の意なり。次の二字は意義不明なり。次の二字は se-len にて「曰」なり。次の二字は意義明ならず。恐らく「眞」の譯なるべし。最後の字は明ならざれども čien とよむ。グルーベ(707)に「非」を譯して「乖千」とあり。二字は恐らくこれと同字ならむ。

XXVIII 第五節の初め三字は fu-un-〔čе〕にて漢譯の「遺」なり。滿洲語にて「餘」を funčen と云ふ。同一語なるべし。以上氣付きしままに列記せり。

〔安馬彌一郎〕

完顏世祖の崇天に就いて

小川裕人

金史禮志南北郊のところには、

金之郊祀本於其俗、有拜天之禮、其後太宗卽位、乃告祀天地、蓋設位而祭也、天德以後始有南北郊之制、

とあつて金の告祀天地の儀式は太宗を經て海陵時代に至つて完成された。然しその拜天の禮は建國後に至つて始つたものではなく、固有の風俗に基いたのである。金史には崇天に關する記事は世祖の時代から見え、世紀には今の敦化地方の諸部長烏春が世祖に挑戰して師を出した時の記事に、

大雨累晝夜、氷澌覆地、烏春不能進、旣而悔曰、此天也、乃引兵去、

とあり、又世祖が破多吐水の決戰に於いて、桓赧散達兄弟を敗走せしめた時の言として、

今日之捷、非天不能及此云々

とある。更に桓赧傳(卷六七)にもこの時のことを記して、

以戰勝告於天地、頒所獲於將士、各以功爲差、

とある。この後の征服戰に於いてもこの崇天思想が利用されたものゝ如く、この亂の直後に起つた盃乃(完顏氏の部と隣接した諸部長)討伐の記事(世紀)にもこのことが認められる。

完顏氏も景祖時代には衆に推されて諸部長となり(石顯傳)未だその世襲權は確立して居なかつた。然るに世祖の襲位は父景祖の意志によつて決定された(撒改傳)。世祖の初頃に起つた桓赧兄弟の大亂は、蓋し世祖の承襲に對する反抗運動に基くもので完顏氏の世襲主權はこの動亂を經て確立された。金史にこの當時より崇天に關する記事が認められるのは、完顏氏の權力の永續化とその發展に、崇天思想の與つて力のあつたことを思はせるに足るであらう。而して當時の諸部はその成立の初より異種族を含む地緣的な團體なることは拙稿「生女眞勃興過程に關する一考察」に於いて述べた如くである。